明治大学平和教育登戸研究所資料館
第6回企画展記念　第二回講演会

NOBORITO 1945 ―登戸研究所70年前の真実―
第二期　8月15日以降の登戸研究所
戦後の登戸研究所と所員たち

明治大学平和教育登戸研究所資料館長
山田　朗（文学部教授）

はじめに

〔1〕　70年前＝1945年8月15日以降における
　　登戸研究所での証拠隠滅作業

〔2〕　所員たちの戦後
　　公職追放、起業、米軍（GPSO）への参加、
　　米軍〈秘密戦〉への協力

明治大学生田キャンパスの歴史

1947年　GHQ撮影　国土地理院所蔵

1932年～1937年：日本高等拓植学校
ブラジル移民（アマゾンでのジュート栽培）養成

1936年陸軍撮影航空写真

1941年陸軍撮影航空写真

（ともに国土地理院所蔵）

南側の丘陵から見た日本高等拓植学校の全景（上塚芳郎氏提供）

明治大学生田キャンパスの歴史

- 1937年～1945年：陸軍登戸研究所
- 1945年～1950年：
  慶應義塾大学・北里研究所・巴川製紙などが使用
  （国有地を一時的に借用）

明治大学生田キャンパスの歴史

- 1950（昭和25）年に明治大学が跡地を取得

  登戸研究所敷地11万坪（東京ドーム9個分）
  現在の生田キャンパス5万坪

- 建物89棟（コンクリート製7棟）があった

- 1951年から農学部のキャンパスに

- 1964年には工学部（現・理工学部）も移転

明治大学生田キャンパスの歴史

1960年代生田キャンパスの木造建物群（吉崎一郎氏撮影）

Ⅰ　敗戦にともなう証拠隠滅作業

1　証拠隠滅作業

〔1〕1945年8月15日午前中に陸軍省軍事課から
「登戸」「ふ号」関係の証拠隠滅命令が出る

〔2〕疎開先（伊那）でも書類の焼却、器物の破壊が徹底して行われる

→　全国の軍事施設で共通の作業

→　膨大な戦争関係資料の消滅
（主に降伏受諾から連合国上陸までの2週間で）

← 現在の中沢小学校
（旧・中澤国民学校）校庭

中沢小学校校庭から掘り出されたがれき →

〔3〕例外：中澤第3分工場（福岡社）からの「放火用謀略兵器」の流出　→【企画展で展示】

２　証拠隠滅にともなう事故・不始末

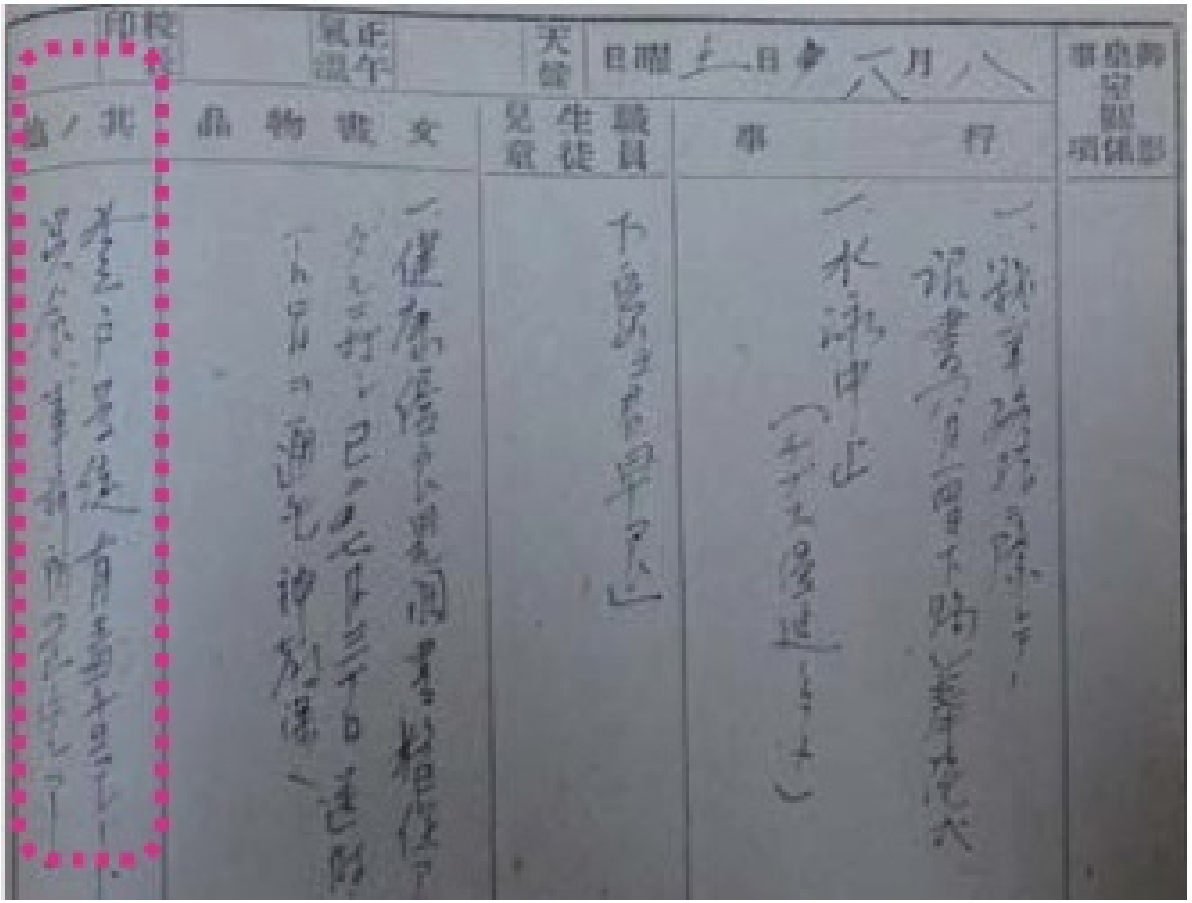
〔1〕毒入りチョコレート誤食事件（伊那）

伊那村分工場（伊那村国民学校）で毒入りチョコを動員学徒に誤って与える

→　胃洗浄などの措置で犠牲者は出ず

→　〈本土決戦〉用の攪乱兵器として毒入りチョコを製造していた

→　他の軍事施設でもニトログリセリンの誤食・暴発事件などが起きる



伊那村国民学校（現・東伊那小学校）1945年8月18日学校日誌

「登戸学徒有毒チョコレート誤食事前〔後か〕処理完了」の記載

〔2〕偽札燃え残り（登戸）

連絡機関と第三科が残っていた登戸でも証拠隠滅作業

→　器物破壊のため（？）に戦車も使用

→　偽札製造のための印刷機

（破壊？、払い下げ？）

残った偽札を焼却

→　灰を多摩川に遺棄するも、燃え残りが河岸に漂着

→　集めて相模湾に流しにいった

残った製紙原料や偽札の切れ端

→　地元業者（山田紙業）に払い下げ

登戸研究所で製造された六連偽札（断裁前の未完成段階での廃棄品）
（渡辺賢二氏寄贈）

Ⅱ　登戸研究所の所員たちの戦後

1　所員・雇員たちの復員

〔1〕証拠隠滅作業の後、8月のうちに解散式（伊那）

→　残務整理者以外の所員・雇員（出征者含む）は復員

〔2〕米軍による登戸研究所施設の接収（10月～）

→　ＧＨＱ参謀2部による所員の尋問

→　情報提供と引換えに免責措置がとられたと
いわれている（戦犯として起訴された者なし）

〔3〕登戸研究所関係者のおかれた立場

研究所所員（技術将校・技師・技手）は、1946年1月の公職追放令で公職※にはつけず

→　起業、一般企業・家業に復帰あるいは就職、帰農など

雇員・工員には退職一時金が支給され、解雇・帰郷

※　公職＝公務員・議員・教員・マスコミ関係

２　起業した事例（伴繁雄氏の場合）

〔1〕伊那村分工場工場長・伴繁雄（元技術少佐）

地元に残り、元所員らと「上伊那農村工業研究所」を設立

〔2〕登戸研究所の技術と地元の資源を活かした製品の開発

例：パーマネントキャンドル（戦後の電力不足に対応）

ベントナイトクレンザー（地元の白土を利用した製品）

左：伴繁雄氏とパーマネントキャンドル（木下健蔵氏提供）
右：ベントナイトクレンザーの包装箱（新井幸徳氏寄贈）

３　関連企業に就職した事例

〔1〕電波兵器関係者（北安分室）

北安曇郡池田町に移転していた「日本高周波株式会社」に就職

〔2〕元第一科長・草場季喜（元陸軍少将）ら役員に

〔3〕電波兵器技術の平和利用

例：高周波による木材乾燥・接着・屈曲金属焼き入れ、塩化ビニールの接着　など

４　登戸研究所関係の軍事技術のその後

〔1〕「く号」：怪力光線・怪力電波

→　電子レンジ・魚群探知器などの技術のもとに

→　発想としてはレーザー兵器に継承され、実用化

〔2〕和紙の機械漉き技術（戦時中に研究・試作）

→　懸垂短網自動抄紙機などとして実用化

〔3〕「マルケ」（ね号）：熱線（赤外線）誘導式爆弾

→　銃砲の自動照準装置、ミサイルの誘導技術として実用化

〔4〕偽札・偽パスポート

→　米軍の〈秘密戦〉遂行の道具として活用される

５　米軍ＧＰＳＯ（政府印刷補給所）での活動

〔1〕1950年春（朝鮮戦争直前）

→　元第三科長・山本憲蔵（元主計大佐）から元三科員数名に連絡

〔2〕ＧＰＳＯ（Government Printing Supplies Office）

→　米軍横須賀基地内にあった野戦研究班（ＦＲＵ）の下部機関

→　対共産圏〈秘密戦〉のための資材を供給する組織

→　山本憲蔵をチーフに元三科員10名ほどで構成

初期ＧＰＳＯがあった建物（現存）　資料館撮影

〔3〕1952年6月、山本は新拠点設置準備のためにサンフランシスコへ

→　後任のチーフに伴繁雄（秘密インク・写真などの高度な知識）を推薦

→　1952年4月より、伴は横須賀に勤務（契約期間10年）

→　ＧＰＳＯは30人ほどの規模に（第二科・第三科関係者が中心）

（個人蔵写真）

〔4〕1961年、ＧＰＳＯはサンフランシスコへ移転

→　それまで2年交代で横須賀とサンフランシスコで勤務

→　中国・北朝鮮・ソ連のパスポート・証明書類の偽造

→　1961年以降はベトナムの偽造紙幣の製造も行われたとされる

〔3〕登戸研究所（研究開発）と中野学校（人材養成）の融合

→　本土決戦に際しては、〈秘密戦〉関係機関は、地理的にも接近し、開発・製造・実戦が融合する体制になりつつあった。

登戸研究所が北安曇・伊那、中野学校が二俣・富岡

→　いずれも松代を防衛する重要拠点

おわりに

〔1〕戦争・〈秘密戦〉の記憶を残し、戦後との連続性を検討する必要性

〔2〕明治大学中野・生田キャンパスで戦争を語り継ぐ意義

明治大学における戦争遺跡
生田キャンパス

陸軍登戸研究所関係の遺跡(1)

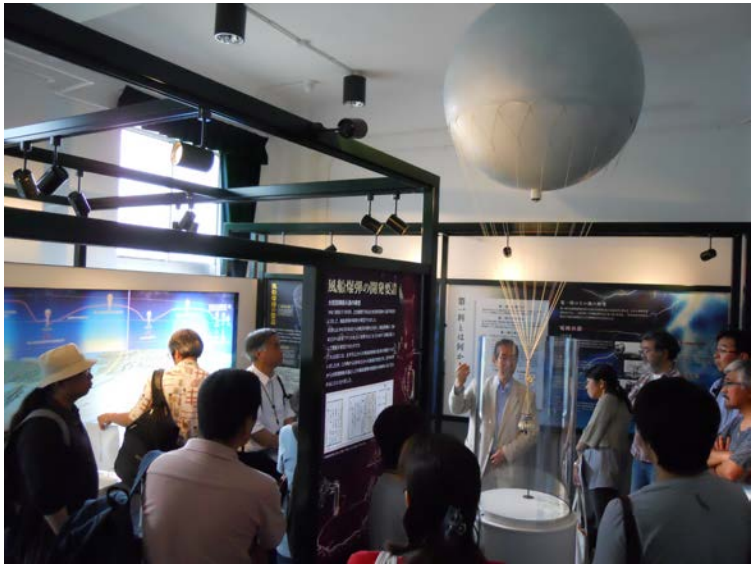
弥心神社（現・生田神社）

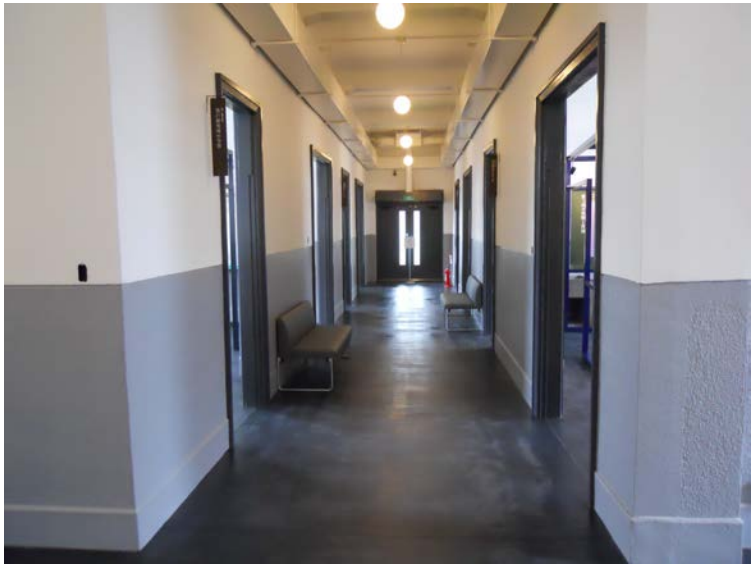
陸軍の星マーク
の入った消火栓

動物慰霊碑
〈表面〉動物慰霊碑
篠田鐐書
〈裏面〉昭和十八年三月
陸軍登戸研究所建之

明治大学における戦争遺跡
生田キャンパス

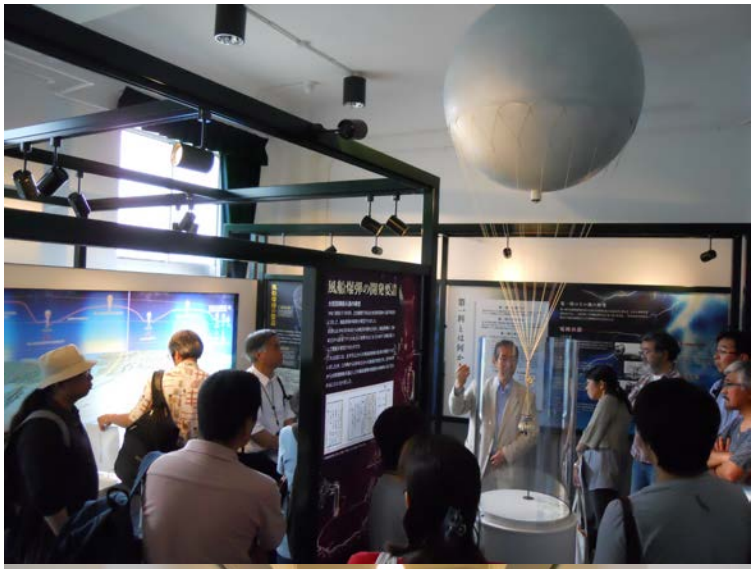
陸軍登戸研究所関係の遺跡(2)

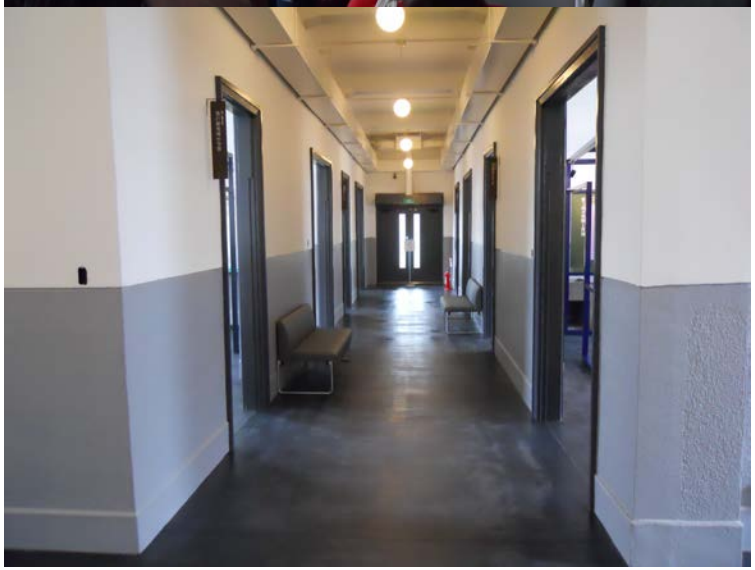




36号棟（生物兵器開発）
＝登戸研究所資料館（2010年3月開館）
　水～土10時―16時開館　入場無料
上：外観、右：内部

明治大学平和教育登戸研究所資料館





登戸研究所資料館
水～土10時～16時開館　入場無料
生田キャンパス西南門そば

上：外観、右：内部

明治大学平和教育登戸研究所資料館　第6回企画展

NOBORITO 1945

—登戸研究所 70年前の真実—

＜第一期＞

2015 8/5 水 »

＜第二期＞

2015 11/18 水 > 2016 3/26 土

※第一期展示は会期終了まで併せてご覧いただけます。

【開館時間】10:00～16:00　【休館日】日曜～火曜、2015年8月12日、12月25日～2016年1月6日、1月16日、2月5日　【入館料】無料

明治大学平和教育登戸研究所資料館

The defunct Imperial Japanese Army Noborito Laboratory Museum for Education in Peace

〒214-8571　神奈川県川崎市多摩区東三田1-1-1　明治大学生田キャンパス内　TEL/FAX044-934-7993

http://www.meiji.ac.jp/noborito/　https://www.facebook.com/Noboritoshiryokan　https://twitter.com/meiji_noborito

facebook　twitter

【主要参考文献】

〔1〕伴繁雄『陸軍登戸研究所の真実』（芙蓉書房出版、2001年、新装版2010年）

〔2〕海野福寿ほか編『陸軍登戸研究所―隠蔽された謀略秘密兵器開発―』（青木書店、2003年）

〔3〕山田朗・渡辺賢二・齋藤一晴『登戸研究所から考える戦争と平和』（芙蓉書房出版、2011年）

〔4〕渡辺賢二『陸軍登戸研究所と謀略戦』（吉川弘文館、2012年）

〔5〕山田朗・明治大学平和教育登戸研究所資料館編『陸軍登戸研究所〈秘密戦〉の世界』（明治大学出版会、2012年）